

聖書：マタイ 11：1～6

説教題：わたしにつまずかない者は幸い

日時：2019年4月28日（朝拝）

今日の箇所には久しぶりにヨハネが登場します。このヨハネは 12 弟子のヨハネではなく、バプテスマのヨハネです。メシヤの到来を人々に告げ知らせ、その方を迎え入れるための準備をさせる先駆者ヨハネです。その彼はこの時、牢獄の中にいました。4 章 12 節に「イエスはヨハネが捕らえられたと聞いて、ガリラヤに退かれた」と記されていますが、詳しい事情は 14 章 3～12 節に記されます。簡単に言えば、それはヨハネがヘロデ王の近親相姦の罪を責めたからでした。ヘロデは兄弟ピリポの妻ヘロディアを自分の妻としていて、ヨハネはそれを激しく非難しました。その結果、彼は捕らえられ、牢屋に閉じ込められていたのです。

そういう状況でもヨハネはイエス様とその働きに注目し続けました。彼が閉じ込められていたのは、当時の歴史家の記録によると、死海の東マケルスという岩山に穴を掘って作られた牢屋だったと言われています。死海の湖面から 1000 メートル以上も高く、目もくらむような場所でした。そんなところに彼の弟子がよじ登って来ては逐一、イエス様の様子について報告していたのです。

そのヨハネが弟子を遣わしてイエス様にこう質問させます。「おいでになるはずの方はあなたですか。それとも、別の方を待つべきでしょうか。」これを聞いて私たちは少なからずショックを受けるのではないのでしょうか。先に触れたように、ヨハネはメシヤの先駆者です。誰よりもイエス様こそメシヤであると確信して、人々にそのことを伝えて来た人です。その彼が「イエス様。あなたは本当に救い主でしょうか？」と問うています。一体これはどういうことかと私たちは当惑せざるを得ないわけです。

ある人はこの箇所をこのように説明します。ヨハネは自分のためにこの質問をしたのではなく、弟子たちのために、弟子教育の目的で、この質問をさせたのだと。これは昔からある解釈の一つで、カルヴァンも注解書でそのように述べています。しかしどうでしょうか。この箇所にそのことを示唆する何かがあるのでしょうか。聖書を読む上で大切な原則の一つは、書いてあることをまず普通に読むということです。反対から言えば、書いていないことから色々想像して、いわゆる「読み込む」といったことはしないとい

うことです。もしこれがヨハネの問いではなく、弟子たちのための問いであるなら、そのことを示唆する何らかのヒントがあるはずですが、しかしそのようなものは見られません。問うたのはヨハネだと書いてあります。またイエス様も「ヨハネに」伝えなさいと言っています。ですからこれは確かに受け止めにくいことではありますが、やはりヨハネ自身の問いであったと見るのが自然と言えます。

私たちにとって、メシヤの先駆者ヨハネが人生の終わり頃になってこのような問いを發したとは、にわかには信じがたいことです。しかし一方で思うべきは完璧な人間は一人もいないということ。聖書に出て来る人物は皆、その失敗も書き止められています。ノア、アブラハム、ヤコブ、モーセ、ダビデ、ソロモン、・・・読む私たちがえ〜？とショックを受けるような罪や欠点も赤裸々に記されています。とするなら、ヨハネだけ例外とする必要はないのではないのでしょうか。むしろ彼もまたそうだったというところから、私たちはかえって大切なメッセージを学ぶことができるのです。

ではなぜヨハネは今頃になって、こんな質問をしたのでしょうか。それはヨハネのこれまでのメッセージを思い起こす時に見えて来ます。彼は3章10節で「斧はすでに木の根元に置かれている」と言いました。間もなく来られるメシヤは、聖霊と火のバプテスマをあなたがたに授ける方であり、手には箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃きよめられる。麦を集めて倉に収め、穀を消えない火で焼き尽くされる！と語って来ました。ところが自分が予告した力強いさばき主の姿が見られません。相変わらず悪はこの地上にのさばっています。ローマの支配も変わりません。そしてヨハネにとって最も辛かったことは自分が牢屋につながれたままだったことでしょうか。彼は正しい信仰者でも、この世で不当な扱いを受けることがあることは知っていました。しかしイエス様がもし、ついに地上に来られたメシヤなら、私をここから救い出してくださいって良いはずではないか。メシヤの支配による新しい世界が現われて良いはずではないのか。なのに思ったほど大きな変化が見られない。そういう中でヨハネの中に戸惑いとある種の疑問が生じていたのは事実だったのです。そこで彼はイエス様に「おいでになるはずの方はあなたなのではないでしょうか。それとも他の方を待つべきなのではないでしょうか。」と問うて、イエス様ご自身の口から答えを頂きたいと願ったのです。

それに対してイエス様は「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい」と言って、次の事実を指し示されました。5節：「目の見え

ない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。」 このイエス様の言葉は、イザヤ書の預言を下敷きとするものです。35章5～6節：「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」61章1～2節：「神である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、云々」。イエス様がこれらのみわざを行って来たことはこの福音書の8～9章で見て来たところです。少しコメントすれば、一つ目の「目の見えない者たちが見」について、福音書には何例か、この奇跡が記されていますが、旧約聖書に一つもその奇跡は出て来ませんし、イエス様以後の使徒の時代にもありません。それは特別なメシヤのみわざとして預言されて来ました。そのことがイエス様において起こっています。しかも5節の言葉は現在時制で語られています。すなわちここにあるみわざは継続的に繰り返し起こっています。ですからこれらの出来事の内に、イエス様こそ旧約聖書が預言して来たメシヤであることのはっきりした証拠が示されているのです。

そして何と言ってもヨハネにとって意味深かったのは6節のイエス様の言葉だと思います。「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」 イエス様がこう言われたのは、ヨハネの中にもつまずく可能性を見ていたからでしょう。このイエス様の言葉から分かることは、ヨハネが思い描いていたメシヤについてのイメージと現実のイエス様の姿との間にはある種のギャップがあったということです。ヨハネの中には、あの方が救い主なら、どうしてこの世界は、また自分は、こんな状況にあるのかという問いがあった。彼が期待した世界と現実の世界には食い違いがあった。そのギャップが大きいために、ヨハネはイエス様をメシヤとして信じ続けて良いのかどうか、不安と疑問が頭をかすめていたのです。これは私たちも経験する思いではないでしょうか。私たちも神に対して色々なイメージを持ち、また願いを持ちます。神はこうしてくださるのでは？と期待します。しかしその通りにならない時、私たちはつまずき始めるのです。なぜ神は救い主なら、こうしてくださらないのか。なぜ神は主権者なら、この理不尽をそのままにしておかれるのか。そのうちに私たちの気持ちも揺らぎ始めるのです。このままこの神を信じていて意味があるのだろうか。さらには神は本当におられるのだろうか、・・・等々。

何が問題なのでしょう。イエス様が私たちの期待通りに動いてくれないことが悪いのでしょうか。そうではなく、問題は私たちが自分勝手に、自分が好む神のイメージを作り、その基準で神を量ろうとするところにあるのではないのでしょうか。ヨハネの場合、彼はすぐさまのさばきを期待しました。偉大なことが起こると期待しました。しかしイエス様は普通の人々の間を行ったり来たりして、神のことを教えたり、癒しのわざをしているだけ。それ自体は素晴らしいことであっても、そんな調子ではいつ約束の御国が来るのか。イエス様を見ていると、言葉は悪いですがイライラしてくるのです。我慢できなくなって来るのです。そこで「本当にあなたは救い主なのでしょうか？」と勝手に自分が考えた仮説に則ってつまづき始める。

しかし私たちが考えるべきは、イエス様はこれから益々人間の期待や予想とは異なる方向へ進まれることです。ユダヤ人たちはローマ帝国を打ち倒し、イスラエルを高く上げてくれる地上的また政治的なメシヤを期待しました。ですからイエス様が奇跡を行なうと人々は熱狂してイエス様を王に祭り上げようとしていました。しかしイエス様はそんな人々の反応を知って、かえって陰に退かれました。弟子たちもイエス様がメシヤとしての力を発揮して地上に素晴らしい王国を建ててくれると思っていました。そして自分たちがどの大臣のポストを得られるかを巡って、誰が一番偉いかとしょっちゅう議論しました。しかしそういった彼らの期待はどんどん崩されていきます。そしてイエス様はついにどこへ進まれたでしょう。それは十字架の死です。私たちの身代わりとして惨めな死を遂げることです。これは人間の予想や期待とは全く一致しないこと、全くかみ合わないことです。しかしイエス様は、その誰一人人間が期待しなかった道に黙々と進んで行かれることによって、私たちに最も必要な救いを成し遂げて下さったのです。

私たちは自分が思った通りに事が運ばないと、神は動いてくれないと苛立ち、文句を言い始めます。そして私は神につまづいたと言うのです。しかしその時、よく考えて見なければなりません。本当に神が悪いのか。むしろ私が独り善がりの期待を神に押し付け、勝手に怒っているだけではないのか。イエス様を真実に見つめたり、信頼するといったなすべきことを怠って、ただ自分がうまく行っていないとわめいているだけではないのかと。

そんな私たちにとって6節の言葉は、静まって聞く時に、素晴らしい慰めの御言葉と

して響いて来ます。私たちもヨハネのように自分が勝手に持った前提に立つてつまずき、もう私はダメだ、私に救いはない、と思う時があるかもしれません。しかし、イエス様は言われます。「わたしにつまずかない者は幸いです」 その意味は、「あなたは自分の考えに邪魔されず、わたしを真実な目で見つめて、わたしに信頼し、従い続けなさい」ということでしょう。イエス様は私たちの救い主として最後まで見通した上での計画を持っていてくださいます。だからここでつまずかず、落胆せず、わたしに従って来なさいと。これは私たちの人生の様々な場面で適用できることです。たとえば病気の時、なかなか癒されない時、私たちは「主よ、なぜなのでしょう」と問います。それに対して主は言われます。「わたしにつまずかない者は幸いです。」 わたしはこれで終わりとならないもっと良い道をあなたに備えている。その先に祝福を用意している。だからここでつまずかないでわたしに従って来なさい。また願って取り組んだのに、うまく行かないことがあります。受験、仕事、結婚、……。私の願いとは違う現実から来る様々なうめきがあります。しかしイエス様は「わたしにつまずかない者は幸いです」と言われます。自分の死の時もそうです。私たちはみな平安な死を迎えるとは限りません。この時のヨハネがそうだったように、人間的には残念な仕方でも死を迎えることもあり得ます。その時、私たちは、自分はダメな信仰者だからこうなるのかと思うのでしょうか。色々なことを考えるかも知れません。思っていたことと違くと苛立つかも知れません。しかしイエス様はそこでも私たちに言われます。「わたしにつまずかない者は幸いです。」 イエス様はその悩み、苦しみ、困惑を越える、最も良い計画・最善の御心を持っておられます。だからあなたは自分の勝手な考えでつまずかずに、わたしに信頼しなさい。全幅の信頼を置いて従って来て大丈夫なのだと言われるのです。

ヨハネはこの言葉にどんなに慰められたことかと思います。彼は心騒いだ状態にありましたが、イエス様が示された通り、イエス様の地上のお姿にはイエス様こそメシヤであることがはっきり証しされています。確かにさばきはまだですが、それがいつなされるかはイエス様が決めることです。ですから自分のすべきことは勝手なスケジュールを設定して勝手に苛立ち、つまずくことではなく、イエス様の知恵とイエス様の方法に信頼を置いて従って行くこと。たとえこのまま牢屋で地上の人生を終えることになったとしても、そこにも主の最善の御心がある。主は最も良い仕方でご自身の計画を成し遂げ、私を祝福して下さる。だから私はここでつまずかずに、なお主に信頼する幸いの道を最後まで選び取って行こう！こうしてヨハネは二度と揺らぐことない確信を与えられて主に従う生涯を全うしたのではないのでしょうか。

私たちも同じでしょう。自分の思った通りとは違う様々な現実があるかもしれません。しかしイエス様はそんな私たちにも語っておられます。「わたしにつまずかない者は幸いです。」 そのあなたの悩みにもわたしの良い御心と計画とがあるのだから、あなたは自分の勝手な思いに邪魔されないで、わたしに信頼して従って来なさい。イエス様は私たちの救い主として、最も良い道を用意しておられます。ですから自分の勝手な思いで絶望することがありませんように。私たちのために尊い命をささげて完全な救いを備えてくださったイエス様の真実なお姿を、御言葉に素直に聞いて見つめて、苦しみの中でも、悩みの中でも、この方につまずかずに付いて行くところにある真の幸いに、なお導かれて行きたいと思います。